

コプト音楽の形態¹⁾

—コプト典礼とその音楽²⁾—

水野 信 男*

Nobuo MIZUNO
On the Musical Forms in Coptic Church
—Coptic Liturgy and Chants—

ABSTRACT: The essence of Coptic music is found in its religious music. (Therefore, the term “Coptic music” usually means “Coptic religious music”.) And, the core of Coptic religious music is its liturgical chants which take a leading part in the service.

In Coptic church, they practice numerous services including those of Divine Office, Feast, Holy Baptism, Matrimony, Office of the Anointing of the Sick, and the Burial of the Dead. All of them are accompanied with music or chants.

For example, each Feast — Advent, Christmas, Epiphany, Lent, Passion Week, Easter, Ascension Day, Whitsunday, Saint’s Day — has its own particular chants, and almost all of them are sung, of course, only once a year. Thus, through the liturgies and their hymns in the cycle of the Coptic year, the Jesus Christ’s life is vividly depicted. The variety and characteristics of their chants are worthy of special mention.

Coptic liturgy consists of a series of chants, which play much more important part in Coptic mass than in Byzantine or Roman. The fact that every liturgy is sung, that is, each part of liturgy goes on by chanting, tells us how melodious the service of Coptic church is.

Still, it is said the liturgical chants of Copts, like their non-liturgical religious chants, exclusively carry folkloric character of Egyptian proper and have little tendency to Arabic music.

Here, the present writer will try to study on the musical forms in Coptic church, focusing his concern on Coptic liturgy and chants.

コプトの音楽の真髄は、その宗教音楽にある。(したがって、「コプト音楽」ということばは、ふつう、「コプトの宗教音楽」を意味する。)そして、コプトの宗教音楽⁴⁾の中心は、各種の礼拝儀式の中核をなす典礼の音楽である。

コプト教会では、聖務日課のミサをはじめ、各祝祭日⁵⁾のための儀式、洗礼式、結婚式、病人のための儀式、葬式など、多くの礼拝儀式⁶⁾を行なう⁷⁾。それらはすべて、音楽、すなわち歌を伴っている。

たとえば、年間を通しての祝祭日——降臨節、クリスマス、主顯祭、四旬節、受難節、復活祭、昇天祭、聖霊降臨祭、聖徒祭などには、その日のための特別の歌があり、このうちの多くは、当然ながら年に1回だけうたわ

れるものである。こうして、まる1年のあいだの典礼とそのヒムにおいて、キリストの生涯は鮮明に描かれるが⁹⁾、そのそれぞれの歌の特徴の差異、歌の豊富な種類などは、特筆に値する。

コプトの典礼は、歌そのものといってよく、それは、ビザンツやローマの典礼におけるより、はるかに重要な役割を演ずる¹⁰⁾。すべての典礼が歌で満ち、また、個々の典礼のあらゆる部分が歌によって進行するという事実は、コプト教会の儀式がいかに音楽的なものであるかを¹¹⁾ものがたっている。

なお、「コプトの典礼歌は、典礼外の宗教歌と同様、エジプト本来の民族的性質につらぬかれていて、世俗音楽的ないしアラビア音楽的傾向をもっていない¹²⁾」といわれる。

* 島根大学教育学部音楽研究室

ここでは、コプト典礼とその音楽に焦点をあて、コプト音楽の形態をさぐってみたい。

I 典礼の形成

コプトは、かれらの新しい典礼を一般大衆の音楽性、理解力に適合させようとした。エジプト人の趣味は、すべてのギリシヤ的なものを拒絶したけれども、その典礼形成に際しては、かれらはまずギリシヤの音楽理論を、後にはビザンツとユダヤの典礼を参考とした。¹³⁾

II 典礼の種類¹⁴⁾

コプト教会のおもなミサとして、3つの異なった形式の典礼があり、場合に応じて、そのうちのいずれかが執行される。この3種類の典礼は現在でもなお用いられているが、その中の1つ、聖キュリオスのミサは今日ではほとんど忘れられ、とくにその *Anaphora* の部分は完全形で行なわれることはまれである。ちなみに、同じこれら3種の典礼は、12世紀までエジプトのメルカイト教会でもまた用いられた。¹⁷⁾

1. 聖キュリロス (<聖マルコ) のミサ典礼

キュリオスの作とされる。祈禱文句につけられた旋律もまたキュリロス自身の作曲といわれる。この典礼のヒム《*ouchoti*》《*ouohnai*》¹⁹⁾以外の大多数の音楽は失われた。

シリアから借りた詞章を除けば、真にエジプト型に属する典礼であり、性格においてもっとも純粋にコプト的なものである。この典礼は、1世紀から行なわれてきた聖マルコの大典礼を、4世紀になって記録し伝承したものと推定されている。原則として修道院で、また教会では非常に特別な場合にのみ、行なわれる。というのは、その典礼がかなり長大なものだからである。(少なくとも4時間はかかるといわれている。)²⁰⁾

2. 聖バシリオスのミサ典礼²¹⁾

教会暦年(待降節より始まる)の通常の日曜日、及び小儀式のためのミサ。²³⁾451年の離教、キュリロス大聖当時以前にすでにコプト教会で行なわれていたもので、コプト典礼の中ではもっとも古いものである。このミサは、およそ24のうたわれる部分を含んでおり、それは大きく3つのグループに総括される。²⁵⁾E. Wellesz は、「この典礼はシリアの型に帰する」といい、H. Hickmann は、この典礼がビザンツ、シリアの影響を受けたものである

ことを指摘している。²⁶⁾その音楽は、いくらかの例外(ギリシヤとの関係)を除けば、純粋にエジプトの伝統に由来している。例外としては、コプト教会でのみ用いられる *Fraction* のあとの「告白」の部分がビザンツのものである。また、ギリシヤ正教会の聖バシリオスの典礼にみられる歓呼の叫び《*tta agia tis agis*》は、コプト教会の聖バシリオスの典礼の中にもある。しかし、旋律は異なっている。コプト教会の聖バシリオスのミサの音楽は、もしすぐれた合唱長によってオリジナルの旋律でうたわれた場合、きわめて美しく効果的となる。²⁸⁾

L. Badet によれば、聖バシリオス典礼の歌は、一定の音でうたわれ、一本調子で、歌というよりむしろ朗読に近い。²⁹⁾また、「このミサを正確にうたうのはむずかしく、完全に正しいうたい方をする司祭はなく、それぞれ少しずつちがっている。Colosuah の主任司祭 Thomas は、「コプト 典礼楽の改革者 Agabios Bichaie のミサのうたい方を知っていた」と述べ、かれの、聖バシリオスのミサ・採譜集の参考としている。³⁰⁾

なお、バシリオス大聖の手に成る典礼には、1. ビザンツ教会、2. シリア教会、3. コプト教会のための3つがあるが、用いられる詞章、ヒム、儀式は、それぞれの典礼で異なっている。³¹⁾

3. 聖グレゴリオスのミサ典礼 (= 荘厳ミサ)³²⁾

コプト教会の大祭日のための典礼。(大祭日以外には行なわれない。)451年の離教以前からコプト教会で用いられてきた。この典礼のうち、*Anaphora* の前の部分及び *Fraction* につづく部分は、聖キュリオスの典礼と同じである。³⁵⁾

この典礼の音楽は、いくつかの長いヒムを含んでいる。その音楽が現在失われつつあることは、カイロ・コプト学院のラゲブ・モフタ師が、「この典礼の歌を知っている唯一の合唱長 Mu'allim Mikhâyî からこれらのヒムを録音した」と語っていることから推論できる。その音楽は純粋にコプトのものだが、例外として、ミサの最初のあいさつ《*i agapi*》と *Fraction* の告白があり、この両者はビザンツの音調をもっている。なお、《*i aghapi*》は、ギリシヤ正教会の St. Basil (聖バシリオス) と St. John Chrysostom の典礼にも発見されるが、その音楽はコプトとは異なる。³⁸⁾

× × ×

この他に、4世紀にギリシヤ語でつくられた聖セラピオンの典礼がある。³⁹⁾これはギリシヤよりエジプトの性格がつよい。

III 典礼に関係する人びと⁴⁰⁾

典礼には次の人びとが参加する。⁴¹⁾

1. 司祭 (ミサ執行者)⁴²⁾
2. 助祭 (1名または2～3名)⁴³⁾
3. 合唱長, 合唱隊
4. 会衆

1. 司祭 (al-kahin)⁴⁴⁾

典礼はミサ執行者, すなわち司祭が主宰する。しかし, 事情によって bishop, patriarch が代行することもある。ミサの執行に際し, 司祭はある程度の自由を許される。司祭は往々, 1つの音節を数分間ものあいだ母音唱法でうたう。(とくに大祭日のミサで。また, 著名な客への敬意を表わすときなどに。)

2. 助祭 (al-schammas)⁴⁵⁾

ミサ台に奉仕する執行人で, 一般には, 聖職階級には入っていない子どもによって果される。⁴⁶⁾

助祭は司祭と会衆の間をとりもつ。その際, 会衆に必要な指示を与える。助祭のレシタティブの型は, 母音唱法はそれほどなく, メリスマも少ないうたい方からなり, 通常は, 時々カデンツで終わるシラビックなものである。

3. 合唱長 (al-'arif)⁴⁷⁾, 合唱隊

ミサの歌を実際に受けもつ合唱長と合唱隊員は, 長い音楽的修養を必要とし, そのために特別の学校がある。合唱長のほとんどは盲目なので, ⁴⁸⁾すべての歌は暗記される。歌詞はコプト語かアラビア語である。司祭が, たとえば聖書の朗読の前後に間を置いたり, 薫香の容器を振るとき, 合唱長は即興で歌をはさむ。ミサのいくつかの部分で演奏されるリズム楽器は, 合唱長かあるいはかれを手伝っている合唱隊の2・3人のメンバーによって使用される。なお, 合唱は特別の場合にのみ登場する。合唱長は, 旋律があまり長かったり, むずかしかったりした場合, 会衆のためにその旋律を代表してうたう。ここでは会衆の代理となるのである。(一方, 助祭が, 司祭と会衆の間の仲介者であることは前項でのべた。)

合唱隊については, さらに次項を参照されたい。

4. 会衆

会衆は限られた範囲で典礼に能動的に参加する。会衆のためにあらかじめ備えられた歌は, ミサ典書に厳格, 詳細に規定されている。——短いドクソロジア・呼びかけ, 2・3のいくらか長い歌, たとえば Trisagion,⁴⁹⁾ 聖

母マリアへの呼びかけなど。また, 会衆は, 司祭との応答で重要な役割を演ずる。⁵⁰⁾この点で, 会衆は典礼にどうしても必要な人びとである。前項でのべたように, 歌があまり長かったりむずかしすぎるとき, 合唱長は会衆の代わりにうたうことがある。⁵¹⁾また, 聖務日課のミサでは **peuple** は会衆ではなく合唱隊員を意味している。⁵²⁾J. Blin の譜例集の中で, 司祭 (L Prêtre) と会衆 (Le Peuple) の応答唱と記されている場合でも, 会衆の歌は合唱隊員によってうたわれている。⁵³⁾これは, 合唱隊員が会衆の代理としてうたっている例である。

IV 典礼に使用される言語

ミサはとくに修道院ではコプト語で行なわれるが, 聖堂区の教会では, たとえば朗読の場合のように詞章が会衆によって理解されることを必要とするときには, アラビア語が使用される。⁵⁴⁾コプト語は今では日常語としての機能を失っていて, それは会衆には理解できないからである。通常の讃美は, コプト語, ギリシア語で, また問答式 (応答式) の朗唱はアラビア語でうたわれる。⁵⁵⁾贖宥 (Absolution) はアラビア語で与えられる。特別の祭日にはミサはもっぱらギリシア語で執り行なわれる。⁵⁶⁾

コプト語⁵⁷⁾——古代エジプト語から派生し, やがてギリシア語のアルファベットに数個の文字を加えて書きはじめられた——は, コプト典礼のもっともオーソドックスな言語である。ギリシア語の使用は, コプト典礼とビザンツ典礼, ひいてはコプト教会とギリシア正教会の相互関連を示し, 一方, アラビア語の使用は, アラブのエジプト征服 (640年) 後のコプト語の衰退とコプト教徒であるエジプト民衆のイスラム化を意味している。⁵⁸⁾

V 教会内部について⁵⁹⁾

典礼の行なわれるコプト教会は, つねに東を向いており, 建築上, 3部分から成る。

1. 至聖所

司祭と助祭のための場所。

2. 内側の内陣 (Khoros)

合唱長, 合唱隊員, 下級牧師のための場所。

至聖所と Khoros は, 彫刻と装飾を施された聖画像のある大きな板壁によって区切られている。⁶⁰⁾

3. 外側の内陣

会衆のための場所。

VI 典礼に要する時間

コプト典礼に要する時間は異常と思われるほど長い。祭日のミサは5～6時間、通常の日曜日(61)のミサでも3時間はかかると、現在一般的にいわれている。

18世紀末の M. Villoteau の、コプトのミサ見聞記(62)の1部を要約すれば、次のようである。

「1つひとつのヒムや歌が長いので儀式そのものも長時間となる。杖をもたないで儀式に立ち会うことは、一種の体刑をうけるのに等しい。坐ることも、ひぎをかかめることもなく、教会の中に立ちっぱなしでいなければならないからである。人びとは、杖をわきの下にあって、つねによりかかり体を支えている。」「ミサがおわったとき、足がしびれ、倦怠感に満ちて外へ出た。」

M. Villoteau は、このように、自らの体験から、コプトのミサが長時間で苦しいものであること、そのため、杖がいかに大切なものであるかといったことなどを述懐している。

VII ミサの形態(64)

コプトの典礼は、全体を通して音楽の流れそのものであり、「ミサの行なわれる間の熱気をはらんだ雰囲気はしばしば大きな精神的な高みにまで達し、その音楽は、時々、異常な激しさで参会者の心に浸透する。」(65)

コプトのミサは次の3つの主要部分から成っている。

1. 前ミサ (Offertorium; 朗読=使徒書簡, Synaxarium, 福音書) (67)
2. Anaphora (大小の祈り; 聖体制定の言葉の朗読; 聖変化のため聖霊降下を求める祈り) (68)
3. 聖体拝領

1. 前ミサ

(1) Offertorium

細心の準備の後、司祭は、かれに提供されたパンにぶどう酒を注ぐ。2・3の朗唱の後、祭壇の周囲を歩きながら奉獻の祈りをうたう。助祭に促されて会衆は「キリエ・エレイソン」と「ハレルヤ」の定型で答える。それに続いて司祭は短い詩句を厳粛にうたい、供物(犠牲)に天恵の下らんことを祈願する。その間、助祭は、時々、旋律的につねに豊かに展開された「アーメン」(Amin)をはさむ。感謝の祈りに次いで、静かな声で、いわゆる「蔽いの祈り」があり、その際、司祭と助祭は、供物(犠牲)を、小鐘がぬいつけてある布 (prospora) でおおう。

Offertorium の儀式は、合唱長によってうたわれる《Sothis Amin》でおわる。この歌の場合、儀式の法則

により、司祭とミサの侍者がミサのこの部分に属する行為のすべてを完了してしまうまでの長い間、その最初の音節(シラブル)を母音唱法でうたいのぼしていなければならない。最後に、司祭の静かな声の朗唱による祈りがあり、ミサの侍者の贖宥がある。

(特定の場合には《Sothis Amin》に『童貞聖マリアの榮譽のための Troparion』がつづく。)

(2) 朗読

コプトの典礼では、福音書のほか、少なくともなお3つの聖書朗読が用意されている。1. パウロの書簡(新約聖書)、2. Katholikon 3. 使徒行伝 (Praxis) (70) 第1と第3の朗読に先だて、厳粛に香が焚きしめられる。第2の朗読にはそれがない。各朗読の前には、また、歌がうたわれる。その歌のうち、合唱長は第1の朗読の前に次の2つの歌をうたう。1. マリアの榮譽のためのヒムの冒頭の節——このヒムのつづく2つの節は十字架の祭と四旬節のためにあらかじめとおかれる——、2. キリスト崇拜の歌。第3の朗読 (使徒行伝) (71)の前には、会衆が Troparion (《Hekos Adam》の旋律にもつづいた4行の詞章) をうたい、それに最後のドクソロジアの詩節がつづく——このヒムはかつてはレスポンソリアルな形で完全にうたわれた——。(形式は Vohem-Paralex) (72) この後、ちょうど今読みあげられた使徒の書簡の章句への注解があり、Synaxarium あるいはコプトの殉教録 (その殉教の模様や、その祭りの日を書いた殉教者の名簿) の頌読がつづく。次の Trisagion は節に分けられた詩で、その4行 (Stykhon) から成る詩節は、かつては2つのコーラスによって交替にうたわれたが、今日では会衆全体によって、つねにギリシア語で、打楽器の伴奏つきでうたわれる。その際の打楽器——シンバル、トライアングル、あるいは Nāqūs (74)——は合唱隊員によって使用される。

(3)

福音の祈りの後、合唱長は Psalms (75) (ダビデの詩篇) をうたいはじめる。これはレスポンソリアルな歌で4行節の連続から成る。その演奏の場合、会衆は、合唱長によってうたいはじめられたフレーズを、再びくりかえしてうたう。あるいは、その歌をうけついでうたいつづける。歌の旋律は、その時々^々の典礼に応じて変わる。つづく詩篇第140の2つの節とハレルヤから成る《Daurat al-ingil》(76)の後、助祭が福音をコプト語で告知する。Lektor がその告知をアラビア語に翻訳する。助祭が東を向いてコプト語で福音書を朗唱する。Lektor がそれを会衆にアラビア語で伝える。そうこうするうち、司祭は「香の焚きしめ」にとりかかる。それから司

祭は、一種の連禱を朗唱する。それは、直前の *Lektor* のアラビア語の福音書朗読のときまで、まだうたわれなかったものである。次に2つの歌があって、ミサは一段落する。1. *Tarh* (*Psali*)⁷⁷⁾, 2. 《*Mard al-ingil*》。後者は、1つの詩篇（往々 *Psali* の最後の節のことがある）、ハレルヤ、及び聖なる三位一体の神へのドクソロジアから成る。

ここで新たに3つの大きな祈り（しばしば、すでに《*Mard al-ingil*》の間に、静かな声で唱えられる）と、全会衆によってアラビア語で朗唱されるニケアの信仰宣言、それにつづく平安の祈り（あるいは平安の接吻）とがあって、その後 *Aspasmos*⁷⁸⁾ が響きはじめる。最後に1つの応答と1つのドクソロジアがあり、ミサのこの部分は終了する。

2. Anaphora⁷⁹⁾

Anaphora は、ローマ典礼と同じ性質の序唱 (*Praefatio*—司祭によってうたわれる) ではじまる。ここで供物(犠牲)はおおいをとられるが、その際、布に結びつけられた小鐘が鳴る。*Praefatio* の後、会衆は *Aspasmos* を2回うたう。最初はとりかえのきく詞章のもの、2回目は簡単な旋律・リズム構造のもの。それから司祭は、*Agios*⁸⁰⁾ を3回、ギリシヤ語、コプト語、ついで往々アラビア語でもうたう。次に司祭は1つの長いパラフレーズをつづけるが、それは、会衆の「アーメン」(*Amīn*)でおわる。キリストの聖晩餐の開始の告知で、ミサは頂点に達する。その、司祭によってうたわれる礼拝の詞章は、福音書のそれに一致する。この司祭の歌は、会衆の短い呼びかけ (*Kyrie eleison*; *Amīn*) にさえぎられながら進行する。救世主の死・復活・昇天⁸¹⁾ を引き合いに出す会衆の応答 (*Anamnese*) は、この歌の次に来る⁸²⁾。この部分の終結を、聖霊に呼びかける *Epiklese* が形づくる。(その最初の部分は司祭により静かな声で唱えられる。) このあとには、内容の異なった7つの小さな祈りがつづく。その内容はしばしば助祭によって述べられる。次の司祭によってある定まった唱調できわめて厳粛にうたわれる祈り『*聖徒の記憶*』が響きやむと、*Anaphora* は、死者に対する代願と、会衆の歓呼にさえぎられながらドクソロジアの手法でうたわれる終結の歌とで完了する。

3. Sakrament⁸³⁾

(1) パンを裂く儀式

コプトのミサの第3部は、ヒムの序唱で始められる。これは4つの節 (*Strophe*) からなり、最後の節は、呼

びかけ、歓呼によっていくどもさえぎられる。それにつづく、いわゆる「パンを裂く祈り」⁸⁴⁾ は、音楽的には、10個のフレーズから成るヒムである。このヒムは司祭によって朗唱され、さらに主禱文へと導く他の節が添えられる。主禱文(新約聖書マタイ伝第6章第9～13節)はアラビア語で全会衆によって朗唱される。一連の朗読による祈りの終りに、歌による結びがつく。⁸⁵⁾

(2) Kommixtion⁸⁶⁾

ホスティア (*Spadiqon*)⁸⁶⁾ の部分を司祭がうたう (“*Das Heilige den Heiligen*”)。助祭の訓誡中、会衆は「キリエ・エレイソン」を3回挿入する。その後、司祭はキリストの身と血の象徴的結合にとりかかる。その際、司祭は *Kommixtion* のヒムをうたいはじめる。そのヒムは4つの4行節から成り、会衆の歓呼が各節のあとで起る。⁸⁷⁾

(3) Kommunion⁸⁸⁾

司祭はパテナ(聖鏝)をつかみながら聖体拝領(信仰告白)への準備の祈りをうたいはじめる。助祭がそれを中断すると会衆は讃美のことばをささむ。*Kommunion*⁸⁸⁾ の典礼儀式の間、合唱隊と会衆は詩篇第150をうたう。その旋律はそれぞれの典礼の場合に従って変わる。また場合によって、ヒム、*Troparion*⁸⁹⁾、そして、その時々 *Paralex*⁹⁰⁾ をもった *Vöhem*⁹¹⁾ がつづく。会衆が主を讃美してひざまづいている間、いくつかの他の儀式が行なわれ、つづいて司祭の2・3の祈り——なかでも教会の感謝の祈禱、聖なる容器の清戒のための祈りなど——があって、その後、会衆が「キリエ・エレイソン」を3度唱えて、ミサのこの部分を終結する。

(4) 聖水による灌水と解散

この最後の部分のはじめには、祭壇の天使の榮譽への頌歌が響きはじめる⁹²⁾。それにつづいて、1. 聖水による灌水、2. 司祭の告別、3. 会衆への聖別されたパンの分配、の3つの儀式が行なわれ、祝福の祈禱、共同で唱えられる主禱文(新約聖書マタイ伝第6章第9～13節)の後、ミサは、「安らかにいけ、主は汝らと共にあらんことを」という成句で完結する。

× × × ×

なお、ミサ前夜 (*‘ashiah*)、ミサの儀式の翌朝 (*bāker*) には、それぞれかなり長時間の、薫香の祝福のための儀式祭を行なわなければならないとされている。⁹³⁾

また、コプト教会の特別の規定には、「ただ1つのミサが、毎日、同一の祭壇で執行さるべきである」と書かれてある。⁹⁴⁾

VIII ミサにおける音楽形式⁹⁵⁾

1. 「根元形式」⁹⁶⁾

本来、ミサの音楽にとって、ほぼ **Oratio** のそれ⁹⁷⁾のような音楽的な大きな型が規準として存在してきたように思われる。**Oratio** はもともとシラビックな朗唱形式である。その中の各々のフレーズは、修飾された終止形の定型で終わる。この定型はそれぞれの用いられる唱調に応じて異なる。根元形式の朗唱群は、単なる **Oratio** ではなく、助祭や会衆の応答をもつものである。その構造は、ローマ祭式での聖金曜日の荘厳な **Oratio** のそれに正確に一致する。

- (1) 共同の祈りへの司祭の誘い
- (2) 助祭の答え：「汝らの注意を祈りへ向けよ」
- (3) 司祭（の会衆への平安の祝福）：「平安が汝らとともにあるように」
- (4) 会衆の応答：「そして汝の霊とともに」
- (5) 本来の **Oratio**（司祭）
- (6) 司祭によって示された意向に対する、助祭の会衆へのすすめ
- (7) 会衆の応答、普通、1つの哀願(たとえば、「キリエ・エレイソン」)
- (8) 司祭による **Oratio** の終結
- (9) 会衆による結び（「キリエ・エレイソン」）

この、音楽典礼の根元形式は、1つのミサの間に20回くりかえされる。[**Oratio** : 7(大)+7(小)+3(大)+3(小)]

2. **mardd** (pl. **mardád**)⁹⁸⁾

応答唱形式。会唱長と会衆が演奏を分けあう。この形式に対する規定は、合唱長と助祭のために定められたコプトのミサ典書の特別の部分に含まれている。そこには、また、会衆の典礼での応答も書き留められている。

3. **Psali** (= **Turuhát**)⁹⁹⁾

応答唱形式。5世紀以来存在している。4行からなる節を16~20もっており、合唱の応答の形式でうたわれる。各々の **Psali** はコプト語でうたわれる節ではじまる。この節は復活祭の前週の間もやはり変わらない。¹⁰⁰⁾**Psali** は **Ton Adam**¹⁰¹⁾ でうたわれる。水、木、金、土の各曜日には **Ton Bartos**¹⁰²⁾ でもまたうたわれる。しかし、礼拝規定によれば、復活祭の前週のすべての **Psali** は **Ton Adam** でうたわれなければならない。復活祭週に適用される礼拝規定によれば、復活祭前日の土曜日の1時、及び復活祭前夜の **Psali** は、よろこばしい唱調

Ton Siwoini でうたわれるべきである。一方、パウロの書簡のための序唱、福音書朗読の前の詩篇の詩句、及び福音書自体は、復活祭の当日には一部は悲しげな、一部は楽しげな唱調でうたわれる。**Psali** 自体は、アラビア語あるいはコプト語で朗唱される。これらの福音書のパラフレーズの各々は、福音書の中に含まれた教義に適合する道徳的忠告で終わる。終曲として、キリストへの讃美がうたいはじめられる。これは、ほとんどつねに2つのリフレインから成る。1. 「北のリフレイン」(合唱隊の1部が教会の北西のすみにおかれているのでこの名がある)、2. 「南のリフレイン」(「南のリフレイン」をうたいはじめる合唱隊は実際に南側にいる)。この2つに分かれた合唱隊は各々1節ずつ交互に交唱の形でうたう¹⁰³⁾。古い習慣では、**psali** は合唱長と会衆の間で、応答唱の形で行なわれた。**Psali** はふだん非常によく知られているので、詞章の進行中の個々のフレーズは会衆によって再びうたわれることもある。**Psali** は、応答唱のほか、母音唱法、あるいは、旋律をつむぎだしながらうたう長いメリスマの挿入句を含む。**tarh** (pl. **turuhát**)¹⁰⁴⁾ という表示は1つのうたい方の手法を示しており、西方の **Tractus** を想起させる。

4. **Psalmos**¹⁰⁵⁾

応答唱形式。4行の詩節1つから成る。個々の音楽のフレーズは、**stychon** または **hink** といいあらわされている。詩節は通常、聖書の詩篇から取られる。**Psalmos** は今日ではふつう合唱長1人だけでうたわれる。しかしながら、いくつかの教会では、臨機に応答唱の形で会衆によってうたわれる要素もまた保持している。旋律は教会暦年——待降節より始まる——の時々に応じて、あるいは、宗教的な祭にしたがって変化する。教会の大きな祝日には、**Psalmos** は《**Singhari**》¹⁰⁶⁾(古代エジプトの町の名)の旋律でうたわれる。

5. **Aspasmos**¹⁰⁷⁾

Aspasmos は記憶しやすい詞章なので、しばしば会衆によってうたわれる。唱調は **Ton Adam** で、打楽器伴奏でうたわれる。このような形の **Aspasmos** は **al-Cherubim** といわれる。

6. **Vóhem**¹⁰⁸⁾

交唱形式。今日では合唱長1人によってうたわれるが、以前は2つのグループに分けられた会衆によって交互に、交唱の形式でうたわれた。

7. Paralex¹⁰⁹⁾

交唱形式。Vôhem についているもので、Vôhem とこの Paralex の両者は非分離。節ごとに交替する2つの合唱隊によってうたわれる。Troparion と同じように、Paralex は非常に古い起源をもち、コプト教会の儀式のほか、ギリシア正教会の儀式にもみられ、Schisma (離教¹¹⁰⁾—451年) 以前の時代からの系統をひいている。

8. Ode¹¹¹⁾ (コプト語 Hôs)

次の Theotokie とともに、ヒムの音楽形式として興味深いものである。少なくとも語源上では古代エジプトの歌と関連づけられるべきであろう。

9. Theotokie¹¹²⁾

クリスマス前の月 (Kihak) に、特別な旋律《lahn kihaki》で、童貞聖マリアの榮譽をたたえてうたわれる。

10. 詩篇第150¹¹³⁾

応答唱形式。通常、ミサの終わりで、また、聖体拝領の行なわれている間に、うたいはじめられる。個々の節は合唱長によってうたわれる。教会暦年の通常の礼拝時には、各節ごとに会衆のリフレーン (Alleluja) がつく。しかしながら、このリフレーンは宗教的な祭に応じて変わる。復活祭には、たとえば、Alleluja に、さらに成句「救世主イエス、名誉(榮譽)の王は死から復活した」をつづける。

注

- 1) 本稿は、筆者の東京芸術大学大学院音楽研究科音楽学専攻・修士論文、1967によっている。なお、筆者は本年冬(1976~77)カイロのコプト学院に滞在する予定なので、この内容は、そこで実地にうらづけられ、さらに、後に、補筆されることになる。
- 2) 野村良雄, 東方典礼の美学〈美学57, 1964; 野村良雄, コプト教会音楽の美学(3.コプト典礼)〈芸術と神秘11, 1962.p. 4; MGG 9: Koptische Messe 参照
- 3) 音楽といっても、それは、朗唱も含め、宗教歌がそのすべてである。この場合、音楽というより歌といった方がより適切かもしれない。
- 4) 「東洋では、それぞれの民族の性格は、その典礼に反映し保たれている」(Grove 2 p. 862)
- 5) 病人の頭に油を注ぎ神聖にする儀式。
- 6) コプトの儀式の様式については、ME p. 543 ff. (その種類、形態、内容なども詳述されている); ナイルの歌、解説書 p. 38 及びレコード(死者のための

ミサ) 参照

- 7) Folkways pp. 1~2
- 8) CC p. 2
- 9) Bulletin p. 51
- 10) Grove 2 p. 867; CC p. 2; Bulletin p. 51
- 11) Bulletin p. 51; CC p. 2
- 12) Blin 序文
- 13) MGG 7 pp. 1619~1620
- 14) =ミサの種類。MGG 9 p. 167 ff.; Bulletin pp. 49~50 参照
- 15) Blletin p. 49
- 16) 本稿VII-2項及び本稿・注68) 参照
- 17) Bulletin p. 50
- 18) Kyrillos アレクサンドリアの司教(376~444)
- 19) この2つの賛歌(ヒム)は死者のための典礼に用いられる(Bulletin p. 50)。
- 20) Folkways p. 2
- 21) Basilius der Große バジリウス大聖(330~378, 一説には329~379)
- 22) J. Braun (Liturg. Handlex.), R. Ménard (MGG), H. Hickmann (Musique et vie mus. sous les Pharaons) が、このミサについて詳細を記述している(MGG 7 p. 1623 参照)
- 23) MGG 9 p. 167; Badet p. VIII
- 24) 本稿・注18) 参照
- 25) この説はまだ証明されていない。
- 26) QOMC p. 102
- 27) 聖体(聖餐のパン)分割式
- 28) Bulletin p. 50
- 29) Badet p. VIII
- 30) Badet p. VIII~IX
- 31) Bulletin p. 50
- 32) Gregorios ナジアンブスのグレゴリオス(c. 329~c. 389) 古代カッパドキア(小アジア)の3大神学者の一人。東方教会4大教父の一。博学雄弁をもって聞こえ、アリオス論争の跡をうけて、アリオスやアポリナリスの説を排撃して正統的信条の擁護に尽力、コンスタンチノーブルの司教にあげられたがユリウス帝の政策にあきたらず辞職。「三位一体論」Logoi theologikoi そのほか説教、論文、書簡などが今日に伝わる。(平凡社: 外国人名事典)
- 33) MGG 7 p. 1623; MGG 9 p. 167 参照
- 34) Badet p. VIII 参照
- 35) Bulletin p. 49
- 36) Bulletin p. 50
- 37) ナイルの歌 p. 37 参照
- 38) Bulletin p. 50
- 39) St. Serapion Themis の Bishop. St. Anthony 門下で、ローマ教皇 St. Athanasius の友人であった。(Bulletin p. 51)
- 40) MGG 7 pp. 1621~1623 参照
- 41) MGG 9 p. 167; Folkways p. 1 参照 なお、聖職の種類については ME p. 538 参照
- 42) =al-kahin MGG では Zelebrant(司式者)となっている。他の文献では priest(司祭)である。以下「司祭」と訳した。(Zelebrant は priest, bishop,

- patriarch など、ミサ執行者の総称として使われていると思われる。)→本稿・本文の次項「1.司祭」参照
- 43) =Sängerchor 合唱といってもかれらはすべてユニゾンでうたう。(適当な訳語が見つからないので「合唱隊」とした。)
- 44) *MGG* 7 p. 1621 参照
- 45) *MGG* 7 p. 1622 参照 al-schammas または al-schemmas <古代エジプト語 schamasi
- 46) *Blin* 序文の凡例
- 47) *MGG* 7 p. 1622 参照
- 48) *Bulletin* p. 48; *Grove* 2 p. 867
- 49) =trisagium (ラテン語) An ancient hymn, used especially in the Oriental Churches, beginning with a threefold invocation of God as holy.
- 50) Church Responses
- 51) *MGG* 7 p. 1622
- 52) *Blin* 序文の凡例
- 53) *Folkways* 参照: このことは L. Badet の譜例集の聖務日課のミサについてもいえる。
- 54) *MGG* 9 p. 167 ff. 参照
- 55) *MGG* 7 p. 1619 ff. 参照
- 56) *MGG* 9 p. 167 ff. 参照
- 57) 拙稿, コプト音楽研究への手引<音と思索——野村良雄先生還暦記念論文集——1969, pp. 461~462参照
- 58) 拙稿, コプト音楽の歴史(島根大学教育学部紀要第3巻——人文・社会科学編, 1970) 参照
- 59) *ME* p. 543 参照
- 60) *MGG* 9 pp. 167~170 参照; イコンについては *Folkways* p. 1 参照
- 61) *MGG* 7 p. 1623
- 62) *Villoteau* pp. 300~301
- 63) =e'káz (アラビア語) *Villoteau* pp. 300-301 の注参照
- 64) *MGG* 9 pp. 167~170
- 65) *Folkways* p. 1
- 66) 奉献文 [唱]
- 67) =Synaxarion (ギリシア語) An account of the life of a saint, read as a lesson in public worship; also, a collection of such accounts.
- 68) =(ギリシア語) 奉献を意味する語。聖餐式の中心的祈りに対する, 東方教会の用語。
- 69) =(ギリシア語) trópos の指小語。In the Greek Church, A short hymn, or a stanza of a hymn.
- 70) =(ギリシア語) The Acts of the Apostles (cf. praxis[ギ]=action, practice)
- 71) 拙稿, コプト音楽研究(東京芸術大学大学院音楽研究科音楽学専攻・修士論文, 1967) pp. 84~85 参照
- 72) 本稿 VIII-6, 7項参照
- 73) =(ギリシア語) An ancient hymn, used especially in the Oriental Churches, beginning with a threefold invocation of God as holy. *MGG* 7 *Noten Tafel zu Koptische Musik* 参照
- 74) 典礼用の柄付きの鐘→*MGG* 7 p. 1621 図2を参照
- 75) 本稿 VIII-4 項参照
- 76) =(ラテン語) 講師, キリスト教会の下級牧師
- 77) 本稿 VIII-3 項参照
- 78) 本稿 VIII-5 項参照
- 79) 本稿・注68) 参照
- 80) ナイルの歌 p. 38 参照
- 81) =Anamnesis (ギリシア語) The recalling of things past; recollection, reminiscence
- 82) =(ギリシア語) 聖変化のため聖霊降下を求める祈り(初代教会及び東方教会)
- 83) 秘蹟, 聖餐
- 84) *CC* レコード 203E参照
- 85) =Commixtion The putting of a small piece of the host into the chalice, typifying the reunion of body and soul at the resurrection. (host=聖体, 聖餅 [聖餐式・ミサのパン]; chalice=聖餐杯)
- 86) =Hostia (ラテン語)「いけにえ」の意。無酵の(パン種を使わない) 供儀パン=聖体(聖餐用のパン, キリストの身体とみなされる)
- 87) 聖体拝領
- 88) *MGG* 7 *Noten Tafel zu Koptische Musik* 参照
- 89) 本稿・注69) 参照
- 90) 本稿 VIII-7 項参照
- 91) 本稿 VIII-6 項参照
- 92) 新約聖書, ヨハネ黙示録第8章第3節 ff. 参照
- 93) *MGG* 9 p. 167
- 94) *MGG* 9 p. 170
- 95) *MGG* 7 pp. 1623~1626
- 96) *MGG* 7 p. 1623; 野村良雄, コプト教会音楽の美学<芸術と神秘II, 1962, pp. 6~7 参照
- 97) =auschijah (アラビア語)=祈願 A prayer, petition, or supplication to God.
- 98) <アラビア語, radda“:「答える」*MGG* 7 pp. 1623~1624
- 99) *MGG* 7 p. 1624 参照
- 100) Karwoche 救世主御受難の週間(枝の主日の11時から復活祭の前夜まで)
- 101) 拙稿, コプト音楽研究(東京芸術大学大学院音楽研究科音楽学専攻・修士論文, 1967) pp. 84~85 参照
- 102) 拙稿, コプト音楽研究(東京芸術大学大学院音楽研究科音楽学専攻・修士論文, 1967) pp. 84~85参照
- 103) *Bulletin* p. 52 参照
- 104) =„in einem Zuge singen“「ある性格でうたう」
- 105) *MGG* 7 pp. 1624~1625
- 106) 拙稿, コプト音楽研究(東京芸術大学大学院音楽研究科音楽学専攻・修士論文, 1967) p. 77 参照
- 107) *MGG* 7 p. 1625 参照
- 108) *MGG* 7 p. 1625 参照
- 109) *MGG* 7 p. 1625 参照
- 110) 拙稿, コプト音楽の歴史(島根大学教育学部紀要第3巻——人文・社会科学編, 1970) 参照
- 111) =hôs (コプト語)<古代エジプト語 hess.t=singen *MGG* 7 p. 1625 参照
- 112) <Theotokos (ギリシア語) A title of the Virgin Mary as 'Mother of God'. *MGG* 7 p. 1625 参照
- 113) *MGG* 7 pp. 1625~1626; *MGG* 7 *Noten Tafel zu Koptische Musik*

補足：注の中で、省略記号で記した参考資料は次の通りである。

- Badet*……L. Badet, *Chants liturgiques des Coptes*, Kairo 1899
- Blin*……J. Blin, *Chants liturgiques coptes*, Kairo 1888
- Bulletin*……*Bulletin de l'Institut des Etudes Coptes*, Le Caire 1958
- CC*……*Coptic Chants* (Institute of Coptic Studies, Section of Coptic Music, Anba Rueiss Building, Ramses St., Abbassiya, Cairo)
- Folkways*……*Coptic Music*, Recorded in St. Mark in Cairo, Folkways, Religious Series
- Grove 2*……E. Wellesz, *Eastern Church Music* (*Grove's Dictionary Vol. II*)
- ME*……E. W. Lane, *An Account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians*, London 1860
- MGG 7*……R. Ménard, *Koptische Musik (MGG VII)*
- MGG 9*……R. Ménard, *Koptische Messe (MGG IX)*
- QOMC*……H. Hickmann, *Quelques observations sur la musique liturgique des Coptes d'Égypte* (*Atti del Congresso Internazionale di Musica Sacra*), Rome 1950
- Villoteau*……M. Villoteau, *De l'état actuel de l'art musical en Égypte (Description de l'Égypte 1809-, XIII, XIV)*, Paris
- ナイルの歌……コプトの宗教音楽 (小泉文夫, ナイルの歌), Victor 1966<テープ (7 インチ 2 巻), 1964